ふるさとへ
――バブル崩壊と、コロナ禍の中で思った事

酒井恵三

私の故郷は金沢市内で、生まれてからは大学時代の四年間を除いてはずっと金沢に住んでいる。私が大学時代を過ごした都会は名古屋だが、同じ城下町とは言え、金沢と名古屋はあらゆる意味に於て正反対の都市だと思えてならなかった。恐らくずっと金沢に住み続けていたとすれば、ふるさとの良さ等良く分からなかったのではないか。

私が名古屋で過ごした四年間はまるまるバブル時代で、その喧騒の只中で私は過ごした事になる。バブルの現出はやはり太平洋側の大都市の方が顕著だったから、金沢に帰省すると、まるで町自体がぼんやりと眠っている様な感に襲われてならなかった。また空気の違いと言うか、互いの方言の違いも耳についた。私には金沢の人間が（名古屋の人間に比較すると）ゆっくりとした思考をして、ゆっくりとした話し方をする様に思えてならなかった。

しかし、就職してからしばらくするとバブルが崩壊し、それまで美徳と考えられて来た価値観や習慣の多くが否定される様になった。私は金沢で就職する事になったけれども、実際名古屋を離れる時、うしろ髪を引かれる思いも無かったとは言えない。その思いを断ち切るきっかけの一つとなったのが、バブルの崩壊だった。

今思えば、バブル崩壊はそれまでかけ声の一つでしか無かった「地方の時代」と言う言葉を、或る程度は実体の伴ったものにしたのではないか。それまでの東京や大阪、名古屋への人口や産業の極度な集中に対し、人々が本格的に疑念を抱き始めた出来事でもあった。その根本的な解決が現時点では不可能ではあっても、その問題提起が多くの人の脳裏に刻み込まれたとなると、問題の何割かは解決したに等しいものがあると、私は常々思うが、バブル崩壊の衝撃の凄まじさは他方に於てはこの様な良い効用もあるのだと、（少なくとも私自身は）考えずにはいられなかった。

昨年（二〇二〇年）初頭からコロナ禍は続き、それはバブル崩壊やリーマン・ショックどころではない価値観の変容をもたらしているが、この暗闇の向こう

に見える光明は必ずあるし、それも最早そんなに手の届かない所にある訳でもないと私は考えている。金沢、引いては石川県全体がこれまでどちらかと言えば観光業や飲食業に比重を置いた産業構造ではあったが、これからはテレワークに伴うＩＴ産業の創生や、新しい生活様式の普及や深化に伴って生ずる、新しい産業の誘致がますます大事になる。例えば同じ古都とされる京都が、こうした新産業の創生や誘致に積極的で次々と成功して行った様に、金沢やその周辺ではそうした産業が根付く環境は結構揃っているのではないか。実際、京都や大阪等、関西圏には無い水質の良さがある事を思うと、条件は更に良いのかも知れないし、都会圏からの適度な距離感がある事も色々な意味で、プラスに働く要素になると考えるのだ。